

Partners Action

宮川刷毛ブラシ製作所の製品は、最大限のパフォーマンスを発揮するため、毛の種類も猪毛・馬毛・豚毛・山羊毛など、目的に合わせて選定されます。例えば緻密さにこだわる画家や寿司職人、アトピーで悩む方など、さまざまな顧客の要望に、職人である宮川さんは真剣に耳を傾けます。その上で、最適なブラシの種類や硬さ、毛の質、長さまでを細かに提案。本質を見極めた上で最適解を提案する姿は、まさにコンサルタントそのものです。

「技」「技術」「経験」 コンサルタントとしての職人

「伝統工芸といっても、『年数があるから』『昔ながらの形だから』というだけで守られるのは違うと思うのです」と宮川さんは語ります。本質は「技」にあり、何代も続いてきた「技術」、そして顧客の細かな要望に応えて磨き続けてきた「経験」があつて初めて、伝統工芸は「今の暮らしに生きる道具」になれるのだといえます。

「技」「技術」「経験」

SDGs時代の伝統工芸

宮川さんは定期的に展示会などに製品を出展していますが、参加を重ねる度に「SDGsを意識する企業や顧客が増えてきている」と実感しているとのこと。「環境配慮」や「持続可能な開発」がキーワードとなる現代において、自然素材を用い、長く使える道具を提供する宮川さんの姿勢は、まさにSDGsの理念と合致します。ただ、近年では質の良い動物の毛も手に入りづらくなってきたといえます。

次世代に伝えたい匠の技

かつては美術大学の学生などが宮川刷毛ブラシ製作所を訪れ、工房で製造工程を見学し、職人技に触れる機会がありました。コロナ禍の影響でその機会は減少。



▶外国人観光客からも人気のメイク用ハケや日用品ブラシ



▶国連NGOであるJACE(UNGOs)からは「SDGs活動認証」を受領。

「ものをつくる現場を見て、道具がどのようにできているのかを知ることは、物を大切に使う気持ちを育む。それこそがSDGsの入り口だ」と話す宮川さんは、今後工房見学も活性化させていきたいといいます。作り手と使い手が距離を縮めるこの取り組みには、「伝統工芸を未来につなぐための教育的な側面もあります。『人の手で作る』という尊さと共に、次代に伝えていくべき価値があるといえるでしょう。」



▲聖徳太子が使用した宗教道具。100年に1度再現されているが、現在のものは宮川久美子さんが製作を担当。

ジェイスパートナーズメッセージ

Message

◆人の手は何でもできる！

皆さまには「人の手は何でもできる」ということを忘れて欲しいです。デジタル化やAI全盛の時流において、自分の手で作りあげる、という機会が少なくなってきました。ただ、やはり人の手はすごいと思います。そこから作りあげられるものには、唯一無二のオリジナリティと品質が宿ります。お手軽さよりも、作りあげる過程を楽しんだり、その味をじっくりと堪能したりして、豊かな生活を送っていただきたいと思っています。



(有)宮川刷毛ブラシ製作所
三代目 宮川久美子氏

(有)宮川刷毛ブラシ製作所について

Company

はり 宮川刷毛ブラシ製作所

- 住所：〒111-0041 東京都台東区元浅草2丁目10-14
- 設立：大正10(1921)年
- 主な製品：ハケ(絵画用/食品用/染色用/工芸用/美容用/塗装用 など)
ブラシ(洋服用/ヘア用/身体用/靴用/木版画用/洗濯用 など)
その他(江戸筆/蒔絵筆 など)



▲二代目宮川彰男さん

<https://edo-hake-brush.com/>



ジェイスパートナーズ
アクション

伝統工芸とSDGs 受け継がれた職人の心 有限会社宮川刷毛(ハケ)ブラシ製作所



▲伝統を感じさせる外観

▲様々なハケ・ブラシがならぶ店内

▲匠の技でつくられるハケ・ブラシ

大正10(1921)年に東京都台東区、浅草通りに面した場所
で創業した宮川刷毛ブラシ製作所。受け継がれてきた伝統と技術をひたむきに守りながら、主に職人が使うハケやブラシを製作しています。現在は、「現代の名工」として表彰された2代目、宮川彰男さんから技と魂を受け継いだ愛娘である宮川久美子さんが3代目を務めています。その品質の高さは広く知れ渡っており、多くのメディアに取り上げられると共に、皇室にも献上されてきました。皇后(現・上皇后美智子さま)がご成婚の時には彰男さんがブラシを製作し、愛子さまが1歳のお誕生日にプレゼントされたヘアブラシは、彰男さんと久美子さんが制作しました。

使い手に寄り添うブラシ作り

伝統工芸品というと「綺麗さ」や「細やかさ」というイメージがありますが、宮川久美子さんのつくるハケやブラシは、職人

▼東京駅の駅舎。白い箇所の仕上げに宮川さんの製作したブラシが使用された。



▲宮川さんのブラシ製作風景

が持てる技術を最大限に発揮できるように、特に「使いやすい」が重視されています。大工や寿司職人、人形職人、版画職人などの専門家のみならず一般の人にも日用品として愛用されていますが、品質の秘訣は「吟味した上質な毛を手作業で植えていく」ということにある。そこには古くから変わらない技法があり、今に受け継がれているのです。

職人の心と技を広く伝えるために

Transmit tradition

◆若者から外国人まで…より多くの人に知って欲しい

宮川刷毛ブラシ製作所の伝統の製品づくりは、テレビ取材や映画、漫画の題材にされることも多くあります。宮川久美子さんは、より多くの方に現代に伝わるハケ・ブラシの製作技法やその品質を知っていただきたいと、積極的に取材に応じています。2025年はフランスのバリで開催されるイベントにも参加。世界に日本の職人の技やその伝統技術のレベルの高さを知ってもらえる良い機会になることでしょう。なお、現在では外国人の製品ファンもいて、東京都台東区の店舗まで足を運ぶ方も少なくありません。

宮川さんが取材協力をしたブラシ職人の女の子が主人公の漫画作品『これこそスケッチ』(著者：鳴居まさね/発行：祥伝社)

